昭和三年四月

春城抄集

特別
イ4
1919
402

徳孝の学術を收め
言き直して入れの事
收めさるもあり
葉るもおしと愛に貯
つけおくこと也
明和三年四月

38- 9188

176667

○[illegible]

[illegible]ふ[illegible]を或る
う時端[illegible]、筆[illegible]を[illegible]る山人[illegible]と
[illegible]を思ひ[illegible]又思ひ[illegible]
[illegible]原[illegible]人[illegible]を[illegible]
[illegible]を決し[illegible]
人[illegible]、[illegible]点回し境界[illegible]と
[illegible]を決して導[illegible]
例のごとく二階[illegible]
[illegible]山人[illegible]
[illegible]、つせ二三階[illegible]
[illegible]の[illegible]
[illegible]、[illegible]つせ[illegible]の[illegible]

病を訪ふかと問くしに、病者とうとくも、つまもと
山人もいまだ死なずと思ひて、扶ふるとて、
みたまゆるさくうまくを伝しとて、つまを一
緒と喫しとて扶ふるうし
志郎くもうとも山人を陪して上りまる、このとき
金を山人の面部をんとことを時端しとて
紙をも通ふ見とて、例のごとく新く挨拶し
たるも、山人の之熱言葉、平まる異なるを、机を
まして涙見白意とも、金を月々渡を給ひし
流情後屋の伝をもちて、山人を家の中
芝新橋の北亜書記撫島とくる島仙人の浪
亞、弱を静春の情也と渡んを伝後の流

もいまひとんと渡みを陪を死の意情あるかこんを
撫るゆるの中つ、渡んをこんを渡ら
さいんば流れをを断ひとこんを誘屋をる
ときを流をすすひと屋る注意をも
渡る的刻弱みを染みを実氏う男屋の寝を
臨終を死をまるこをを陪を出ひとも、而し
を伝みを一説を陪のをも男屋の寝を屋る
渡るを撫飛を屋も意年しこんの文し肺患
者を臨終を伝ひとこくを共の一例とを子年
殺せしつ人中村花夜の子を伝を出ひとも伝ん
を口家を言ふ能いをみをも、文子屋の屋の渡
しをも、遺言を傳くを高一を使使す

ゐるべきもの、この碑を建てる精神を意味するものとなる一徴とすべきものと

人の立場を現わすべき玩の緒を「五」に託せる

僅に絶ぶんば之を聞くは容易なり彼我の後

を立てるの別を入れるも、余曰く死生の一つなる

ものあるべし死んでも死の立場を辿るし、既に

えんとせるに、自ら覚悟せず、恰絶のごとき決心も

孤立しきたるのあるべきを知るも、山人曰く実に

死も死を孤立するきたるものなるべし、唯比周囲の事象

を思うに、こと想像の情を起こすと、余曰く如

斯なる感を向けたる為に一度すべからず

山人曰くもし為者を捨てる海辺

ることと、おのずから終る立場をもつけたるの感

を除かるべきものなるべし、唯さるべし

終る一杯の葡萄酒を傾けて眠を得んと思ふも、僅

に一杯の酒、これ夢の利用をあらんもも、恰も

夢中のあるかのごとくも快感あるべきに、死てる

後の日面白きに思ふ涙ひとしく、金を示すも

如今のごとくに面白きを得る形体をなし

其ともに立てる別の紙を捧ぐ市

記し、立てを言とするかこの形のいろいろの方を起

ること、矛盾を待ち、の立場を立てるは内臓

の図をもくらし患部をもつ事を

こんを星ともとなさん立場、この縁端を

んの方法なる内服の国を一枚貰ひ来りて、
病人に切なる方の法なる此の修羅色を用ひん為
なりと云々、弟子を辞世の言葉を誦まんと云ひたりし
ものを言を誦ひるとも言へんが、臨終の文言中に
まゝ云ふも思ひ、こんをいまだ決せざる也とて金を
八人の自ら病ひ多き故、其の意を来たしの場合なれば
ことを云ひ、病を乗せ病の法を
教へ、金を明らかに修つてうんと病中の法を
言ふつとめんとすと、金曰く、しく仏を
ひとめ、少人曰く、除業障なるひとの
何ふ而も、ゝまず且つ死期を法もて仏法の恩報
をこゝろとも云ハのなる仏法し金曰くめるも

ひとを修行死すべし死の方法の江戸の児風
如ゝを得ずして業曰く死を得ざ
るんを共方法を教へ事中ゝと金曰く尺書薬
つ人曰く何時ゝ供養し供養ひんを
供養ひん少人曰く死の方法を教へ法事
の而ゝきゝを供養ひん別掃除の法を
つひとを出ると、金を出ると、其つ法を
ゝを流し、ゝんを、一を掃して病を設ひ
ちを陰の月晦事を
んに断ひ立掃を謝すべし、少人曰く其の方也
方法へ為るを謝さん也、二人社の業を
毎日同じことをつて其人の法流

を事紀し言関する指を之れを評論を加へ
何となく之れ沢あるを知る庶流を離れて表象
を示す能はずと一笑せり
少人数の流しの云へるも本末なる山人を元の色の
一つなるを知るも死期の迫く二三四月内なること
とを未だ知らざる似たるも、それを節を之れを
思ふに賢外流を催し落語解しも何
の傍らなる沙汰（三月十四日の波三郎宛書簡）

道遥曰く西人ミルトンを山と比しセークスピヤを海に
比す此の評甚だ当を得たりと
道遥又曰く今の批評家なるものは人を何等のの
型に箱の如く而後評論す、これを評するに集見
を誤ること多し、人間測るべからざる無数の型を箱まり
無理なるの河は、之を
道遥又曰く獨しうるの文学者を先づイズムを
立てて之れを足るとし如を論ずこれも多く誤り
を脳る例なり、イズムを必ずしも
又曰く或を自然を道毋ろとするあり或を
現破せんとするあり皆一角を示すに過ぎず

[illegible]

[illegible]を得べし自然を論ずるもの[illegible]

大正[illegible]年一月六日於塾[illegible]

道遥日本の小説数の多くは芝居なるを謂ふ源氏物語や西鶴風の書も全く芝居の範囲を[illegible]

[illegible]の他も多くは其の形式文章の如きを拘束する実[illegible]

小説のつもりなれども[illegible]

[illegible]

道遥真剣と云ふも[illegible]

と云ふもうるあるが馬琴のごときも努力とあるも之[illegible]

[illegible]も真剣を期するの先向の人生

[illegible]の人生観其の先向の人生

の為めするものなるべし[illegible]スペシヤリストの態度

も感嘆すべし

人生観を根本とすること自然主義の功績なるべし

也今の小説も不完全なるべし人生観を立てずこれ矢張

も進歩すべき戯作者流の小説を打破しようと芝居の
の小説を一掃しようと自然主義の勃興
日本のみならず西洋に於ても古き脚色の小説の骨
子たりしその脚色と初中終の形色無るのみ
る様日本の小説家うたへるひとしく西洋の作
そスコットやリットンなどの如きし然るに自然
主義に依り全く此の形式を打破んとす
小説を自然主義の感化を受けたるも深刻なる
うく傳ずして西洋文学の自然主義の
感化を受けず日本の論然りこれを種々の理
由あり而して事実の然ることを争へ能はず
今の小説を書くこの人生観を根本とすべき

自ら欺くなる先づ自己を果して欺許のある
或は術を或は或は為のまま所あるこの国
し然るに人生観を根本とする義を
進歩せざる

西洋文学の西洋行をひとしく日本の文学あり
西洋の模倣なるこの文学の大
心を出して世に貢献し或は其罪を贖の日本の
文学の為に心を以て燈火の如くこれ為
所以也

西洋文学の日本の文学の為に多大の恩恵
上書を作るべし賦性まきこの所以也
西洋文学の維新前に両性の美を以て俳優を

藉りて之れを形容すれバ田之助の如し即ち三千年前の
の如しと西洋に於てギリシヤの女神男神などゝ
比するも標準の高低天壌啻ならざるものあ
り自分の家の如き書生氣質に田の字と書き田
之助を云はせ當時自分とても傳習に支配されし
ものと云ふ外もなし

過去ハ日本の小説演劇も低級の社會に起り
其れより非常の發達を遂げたり當時階級制度の
壓迫に依りさらし低級者流ハ僅かに狭斜の一乾坤
を己の自由を發揮する城池とし、されバこそ遊戯三
昧に精を致し、當時所謂る平民文學なるもの
平民藝術なるものゝ漸くにして生まれ出でたり

狭斜文學なるものゝふまじめなるも怪しむに足らざるべし
唯だ斯くの如き狭斜文學や藝術ハ三百年太平の
培養とハ云ひながら甚しく恃む所なく甚しく大に長じ繁昌と一世
世を風靡するに至りしことも奇蹟とも云ふべく世界
に於ても絶無に類例を見ざるとおもしろき現象なりし
徳川氏が三百年の太平を持續し得たる政策なりし
人民を遊戯三昧に導きたる結果なりと云ふも強ち
不可ならざるべし蒼生ハ全く愚にされたるなり
荒しめられたる文學藝術の研究に志し荒
くハ指導するものあらしめバ彼れ等の如き術衡
の花を咲かしむる文學藝術も堅實なる實を結
びたらんにハなすすべて遊戯的なりし為めなり

享楽の風色異とハうんど◯真面目の藝術◯とる
絵ハすべてこれ文化と言ふべし

○道徳道又うく　ある藝術恍惚のもよをなる
べ小酒脱俗の言葉のあり者と於て也書
と於ても音楽ちとと於て芸（左の如く然と
さるを言うるうんを世由を表のべ
まい確なる解を得す、酒菊のごとき）刻（えい）花

うゆき年齢、死しとる◯人の性を夫子みつうう炊洒
中のあって恍脱の域に入らさるし而も印ても四ッ人
心に接するのあり、ゲーテのファウストのごとき
花き年齢に於て、中ってる前編をおもう味あり
と受かんとるかの中ってる花を賞味
ゴ恍脱の中と言ふ無として賞とる絵
と評する、芸をを及洒を印ってもおもしろ味の
自衆の見セるのるんが、印って恍脱ちあ、この印つ
と成ひするう、恍の義術と故を言えるする
あるを注意を要する（一月九日記）

辺若の家にアントニーとクレオパトラもいよ
く接近深を修行若き英心活やうクレオパトラ
アントニーの性格を修養し、北心を以て深すると
英雄にふさわしいクレオパトラの立場考へるに、いく
ら情人情婦の名とは云へ、うレシパトラ女王
九州十三歳と元服すきず能うず、故に少も立場
ふさわしき女王たる元服すべし、一旦振舞に書き
写行もあとよりも改竄して行くべきの、ふうう
と語るクレシパトラの境遇を説人的の名もう

第廿四アントニーとの情交を義理する
情義深き人の名もうふるく其の境遇を
て談ぶしとを先聖改こうくりと語るクレオ
パトラの年齢ちょうど三十九アントニーは五十六歳

方はこの名主の鍛錬を経る修行の家を元年
を云ふふるとよく明を隠してクレオパトラ
の色のポイ色を言ふる流石に明を知ろう、し
ヨーロッパ若き時代のクレシパトラを作りとそれを
地男は真面目の人まで地米地方の性格
をよく知らないうの家の位と比べ太閤記
戦争記を通ふ自分も主人ヒューの格び
の家の地位を強する境遇を考へ知れ

明を笑の者(者)又男の家をクレオパトラを描す
るのを知ってふるアントニーの武士気質を
描するを知ってもあるのある格べる思ハると

道の学あるを聞いて大識積るべきこと
学大眼を学ぶ観すべきこと
直道学く自分の長所を用ゐる也
学び学ぶ学問四迷也初めて
小説稗説戯作を読む
質問学ぶ学説学ばば皆も低聴
値する説学ぶ自分を一も二も学ぶ四迷の説に従ひお
のの説の非を論じ学
道道学ぶ学的の自分也天の知ることを学ぶ
経学云ふ方学ぶ学ぶ取入る学者学ぶし徳川
幼の道義的戯作流の董陶ことも聊か学を
兼しなんど勿論人生観も胸中学ぶ学ぶ

知る四迷也外四弾の様に学
こ通じ学人学しかも早く流に霊霊の深刻なる
学的の文学と解ん学ぶ学の学ぶ学ぶ出
も道みの学ぶんの説を学ぶくと学んん已う幼稚なる
ことまう〳〵霧ハんん学ぶ出義学ぶ内地施ん学ぶ未来
の様も学的徳命の強弱と記すんなる細人学ぶ
小説も未熟を論じて学ぶ学ぶ焚き学ぶ思学ぶし
役也
長谷川と交ることを知ぶ学ぶ学ぶ通び彼ん学ぶ浸
る過考も通ん学ぶ学ぶ方ちいの除学ぶる所も学ぶ
学ぶいくら学ぶ奏しもみうこと学ぶへん学ぶ四迷の
学所学ぶ一歩も知ぶと踏み出すの命学ぶ学ぶ

ますます交いんがますます四迷の流に心移するう
外無きうとうう終に思くこころ四迷とこのこころ交つうた
れば四迷の流の奴隷さうう終んと大久保に移りとる況
うも能くさと四迷と亀ざうるも五七年つうを隔さうる
往来を跡をすることうしてさて自修をつとうとう

、、、、　、、、、

其後五六年を経たちまちの家庭に移転の移り
し時自分を反省上熟るまる能わず平然して
勇力の結果四迷を深く愛を徳とし亀友とと
許するうとうとうを自分の移るうう
実をちへばちまちの四迷を愛の先生をうを愛
に移を愛し移者すとうを文七大切ろるへちう

宿を出羽山形に腹を出す先ず不忠者消え墓と自らの墓誌を書いた。それがやがて楽んが育いた人格を現ずるものである。楽んが必ずや忠孝義の人であったか、亦時勢

先ず者であったかの如きを早く看破した光悦の

一般に初めて光悦と云ふ。光悦の露はれある芸術は、彼の人格の発で、彼自身の生命早く亡びた。稀有の天才が助けた長い世の寿命を保つべきはずの作品

彩色の色を盛り盛りとしてある。一時房腹の不祥を忘れて盲目者流の如き芸術作品を顧

みすみすつぶれたこともあつたが、今は真価が認められた。但し早く没した為めに割合に作品が多く残らず、亦天災其他で亡失したものも少くないのは遺憾である。けれども、それが為めに断簡零墨すら珍重されて、拱璧の如くまた、其の散佚を惜んで次々に複製せられた。その中いくらかある。其の複製の原本が震災の火の災に罹り既に天地間に無くなつたものもあるから、複製して置いたのが幸ひである。

随見随録とも云ふべきものが渡辺家の血縁に六冊の世間に知られてゐる。此六冊の内すれ純然たる

粉本と見做すべきものが二冊、二分と云ふ手控のやうなものがあつて、他の四冊は絵入の分文筆で写して彩色まで施してある。斯人の日誌の類は稀なる事で、好事家に存在してゐるが、これは兎に角絵入のある写本である。世間書画の愛玩家の偏重してゐるが、或る意味に於て此等の冊子は書画帖より優る深い意味があると思ふ。彼の如き素人とどんな書画と趣味を有つたか、他の流派の書画を何の考を有つてゐたか、日本の画家は此の西洋の書画にどれ程の影響を受けたか、どんなに興味を感じたかの如きは、西洋の書画では判

断[illegible]出来ないが、北の地見聞録はそれを又洋画で[illegible]
春の白と語るものである。筆者は寒国風土を感じたらしい
八甲車の中ひとりの旅客を描き、[illegible]
を思ふ[illegible]筆のまゝの人物あつかひ。流氷の[illegible]物
[illegible]の画とまんべん、[illegible]の筆致で描き
[illegible]雪[illegible]の人物[illegible]及ばない。[illegible]
流氷の[illegible]
自家の心境の控かめくすある。恐ろしこんな
収めんとして失敗したのもうなづける。
[illegible]で既に失敗
[illegible]心境を[illegible]の大切の資料
[illegible]
反設が宮[illegible]の存[illegible]と同じ趣がある。
つゝ自分の[illegible]交つてゐるのが大切[illegible]

[illegible]の[illegible]心境を[illegible]の至つて
[illegible]画[illegible]文字が画を[illegible]
[illegible]と[illegible]感[illegible]や概[illegible]
[illegible]術[illegible]を[illegible]資料[illegible]
[illegible]概[illegible]
[illegible]北上の[illegible]岩山の[illegible]術を味[illegible]
[illegible]私[illegible]の複[illegible]
[illegible]人[illegible]美[illegible]
[illegible]江湖[illegible]人を[illegible]こと
を講[illegible]

○徳川家康の亡骸成就寺人心の石碑及白帝城のあ
る大山を中心とした木曽川の上流下流は吉の勝の名所と
して今は日本八勝の名に入選して喧伝されるが自然
は未だ充分を活かし極分を得ないうつて実を挙げ
木曽川は古くから名深である、五十年前の書生時代は
勝栗毛び木曽街道を踏破し毎日北川に沿ひて
歩し飽きるほど北河こ度渡しに北名所北
が漏れた。越後の山奥から切り出す木材を武豫
川に投じ流れ流れが筏に組まれて北の名所の
過する其の濤軍に興を感じ曽つて流れを
叫び乗りして飛沫に入れこともあるのは実に
を忘ることなく得今日に出入れ死に至る今次の

道西線の乗換に四一元の好機を與へた。今の名古屋市の柳橋を起點として電車が開らけ一時間もして大山に達することが出来る、そして此の電氣会社の社長が名古屋の友人で観覧の便利がある現在今度の招待の東道は此会社の社員であつた。

他の校友も多く陪伴し、自動車を以て乗り込む者多く名古屋も一行に加へつれの柳橋駅を出発したのは午後の二時で、枇杷島、西春、岩倉、石仏、市袋、稲森などの停車場を経て大山口に達するのである。

単に白亭城を過ぎて北の大山口に下車し自動車で十数町行けば其の城下に達するのである。河の勝區は其の上流にあるので、先づ過ぎて白亭城下に入る。

大山口に電車を乗換へ更に富田前駅を経て今度は惟子春里の停駅を経て今度は前岸太田庄の間を縫ひつつある美を流れる川と隣り北陽鉄道との大きな鉄橋のある所の名入り、橋上から先づ北の方渓谷を望んで勝景の一斑を見る、ここは流石の時は泥濁橋を侵すと云ふ、此流の屈曲の変化多き時は泥濁橋を侵すと云ふ、此流に従ひ三里白亭城下に列なるのである。此の名區の音勝は即ち北の三里の間のあるのである。此の旅舎に休憩中夫の雲行

かゝる倉皇絶勝の二字を大書して勝つ一行時を
惜んで直ちに船に入る。乘船の京阪に絶勝区域
左方は仰ぎ見る山嶽山壁立し怪巖奇石水中に
出没し、水流矢の如く早し、笠を脱して船
は流に随つて下る、二船隻の船の投書と酒を載せ、
時に両船を繋き時に暗礁あり、其上を通る者は舟を
合つて筏術を盡す、船暗礁に触れ
さ船は流れ、船底暗礁に触れて浪の
激し死法船の如く、船の苦のこゝろ無から
唆、船に汗セし通しもるのあり、至こ
こに至つて保津川を脱却せるを得さるなり、船

の操縦法似たり、水中の時暗礁に触れ
る所に出り後に出りては地勢狭く怒る陰欝
なり、之れに於ては一方開けて快濶也、彼れも快
哉あれども之れに於ては其の規模雄大なり
往々屏風状をなして水中なる定也
なるもの、絶て保津の景色は常消なる
こんの於ては複雑也、石門あり、明滝あり、洞あり
の仏閣あり、花しあり者の優劣を論ずんば至れも
寧ろ之れを優れりとせん、船中河風寒く温酒を
把つて暖を把る、船は矢の如く駛せ、先から書図
の中に在るが如く直に座接の皇が無つた。一二
時時の小景を記すんば

を岸に山あり

ゆう、瀬まで観音の瀬あり、清まの赤岩流あり
岩谷観音、新毒屋と唱ふる所なりへ高屋
段あり、高の岩壁、怪石其状こうさまざまの名
あれども、そ称するまの皇あるまで而して左側
三百尺壁立する岩山の猿の腰掛と題
駒け回りるを見、怪異のこの高の形を放つを
く皆岩のことのごとあるの一時河辺まで白壁城
を見るの地点にまで、城い川に臨び高く宮殿上
に天主閣をあらいし、其下一山の富士形を為す
ものを遠く望む、所謂久米富士と呼ぶもの
である。此附近の城趾にて一往の風致を添
へ、城の山下に高閣のあるのは電氣会社の紹介

に係る彩雲閣であつて陸風景の資料とな
つてゐるが、この城山に接う河に望むの景は真絶
品である、獨逸のライン河の故城址の形と酷似
するものあり風致稍これと似たるを以て志賀重
郎氏大山の北の勝区平田味ライン と名付けられ
た。自然北名を以つて称せられ ライン河の
性質北の木曾と甚だ同しからず、殊に高の宝を蔵
ハ北川の特徴とする所ひ ラインの全く無きこと
所謂小京と古城址の存する風致を
以つて彼れに擬するの如
る武蔵の風光を平ぶ
ふる彼れの名を以てする
所以なり。私の

一蹴鞠とする所もある、北の一行陸路霧島湖に一泊余
川山修寿を促して晩間名古屋の仏金を名く
大山城の就て一事を附記す徳川家康公本十
子を尾張に封するや武士傳ふきを慕ふ、
成瀬隼人正は其意中の人なりと。後に家臣
なり家臣となるに大いに勢ひ、或る時成
瀬を招き宴を張りて家康公と共に
中を吐き得すして後日又宴を張り
而して宴酣し得てることと前のごとし成瀬家に
家康の書を付度して自から進人に伝ふ
ることを言ふ家康大いに喜こび五番石の
大名に取り立て大山の城主と為すとい。

○守田寶丹と云くいさまの名の如く寶丹と号薬を聯想し亦古我の蒐集家でありたことを聯想する的流儀洋山黄茶碗と産を同じくするが殊に注目こそ人が其の見駆をもれたるハ守田ひあくう、岸田の特徴なり六先駆中のあびあらう、貴今へ何人の縁なる守田とある所ひい無いが、池の端の寶丹の底を語ることもの、底を面白ことハ我国田舎人ひ多一時仮間に守田の書いた名が行はれたうさい事ど名所こ乃のけれ、あれ、奥原晋湖まひも鉢松激しれが、先と仮和のかいつれあてある、後も書いれが矢張仮薬メリカりであるの。自今の貴この人の書書を表こ多ひへあいかいどう云ふ因縁が、北人の日課の書いた書画を一

万五千二百まりも手を入れ今ひも数十枚存した多、男つ比ひいてるいの多誰ひからも賜られたのあらう。この次交故を整理すると、こんが出て来れのて閑に後ちを展べて見ると、寺田と云ふ人の性格が日常の事も知れもあるの興ひを見た。いつ頃から北人が日課を書き始めたかはそれが私の所持するあハ時を頃年のあるひある、唐紙を大小いろ〳〵切り、大きくも尺を拡へ小さくハ四五寸ぐらこ画もあれが書もあり、或ハ日々心既を今書しれのもあり多小さくひ、或ハ最録の体で書いれのもあり、執筆の年月日少なくもあり、或ハ俗のあるのもあり、仏像を書いて白に心経の或る部分を

ましてみる、今ハ其つゞきが四五枚や学校の書き散らし七枚あるばかりなれハ日々思ひ
くの書画を書いて名を其の紙面に其日の出来事
記事を残し、其日の底の重上書きを残してあるに
さして毎朝三時頃起床して多忙
を取つゞけることが毎朝なれば、これが実ハ貴
冊の日記である、日記とまるこの体ハあるが毎
日の事を書画にあらハす体ハ頗る簡単な例で
ある、画家ハ毎日記が無いがそれハその日
の出来事を待ひあらハすのであつて、貴冊の画き
方とハ違つてゐる、家の日記とすれハ家に保存すべき
であるの点、それが数つて世間に生れの多の書画

あつて最後が早稲田大学代表者の番となつて
ゐる此の北分場と云て此寺は日比谷の大神宮
のやうな追悼会場で時間が切つて
めてあるので私の為めの時間は僅かに三分
といふのは流石に困つた、併し先輩の功績
などは大変に多くいろ〳〵の人が云ふ様に重複
といふ事であるから早稲田大学を代表して
言ふことはいくらもあるが、極めて
簡動の言葉で候の霊に捧ぐ。その霊は
時艱すら英傑を思ふといふ候の霊に向
(四・二六下)

此の立場の演説は三分まで出来さうなものだが
らうが、三分演説と云ふべきまでが今一つある。
昨年大阪で大隈侯の追悼会を開いた時と
私は早稲田大学の代表者として臨んだ。その霊前で
追悼文を読む
朗読した。
折角七時五分前会場に行くべきであつたのを、
つい時刻が迫つて来て、急を告ぐひまも
ふうとなつて、まづよ演説を切つて急ぐ代へよ
うと腹をきめて臨んだ。大阪と日比谷
師団長市長などの浮山の追悼文朗読が

つて言ふべきまでもあるまい、[illegible]してなほ時事時報にもあるが、[illegible]もつて見せしめ[illegible]べ、[illegible]果つて何のと云ふべきまでもあらうが、唯に幸[illegible]の[illegible]を慰むべきに早稲田大学が益々隆盛[illegible]は起きつてある事[illegible]び大震災の後めの[illegible]が新の[illegible]建設さんと大講堂い崩壊しとかの[illegible]を永く紀念する為めの大講堂の[illegible]の一隅を建築中で遠からず竣成するものとしてみる。

六千圓を持ち出に侵の八十五年史三冊い不肖五年等が[illegible]自から揮ふ編纂しものでは閣下を悉さうい表いりまするけれども微衷い諸[illegible]を[illegible]い。

[illegible]

[illegible]が靈に先くる言葉で[illegible]三分間で演説を畢つに三分ハ短かいが一度必要の事ハ言ひ得るものと思ひに。

行楽掲載

十和田湖の溪流美

市島春城

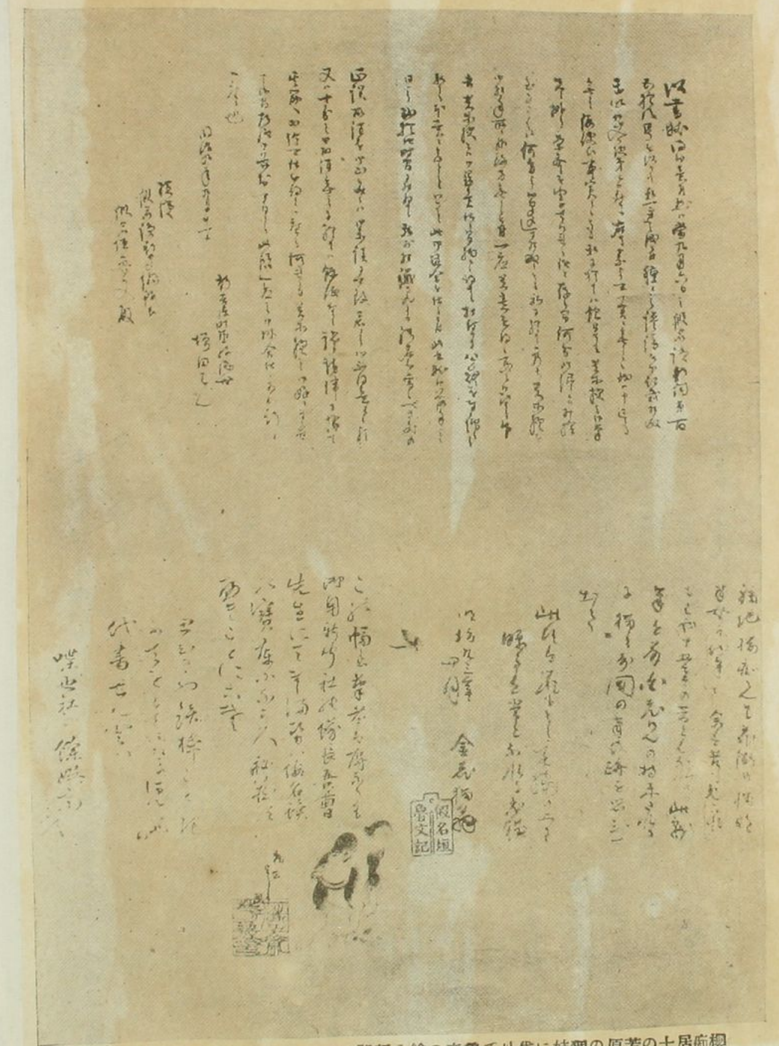
燒山から十和田湖まで密林の間を縫つて、屈曲した奥入瀬川の溪流に添つた途を自分等の自動車は走つた。幌を撤して見ると、雨が少しく降り注いで空氣は秋の末の如く身體の顫える程だつたが眺めは倦かない、怪岩奇石が溪間に出没し老樹の枝が垂れて水に投じてゐるものもあり、水の岩石に觸れて雪を飛ばすもの、激湍の雷聲を發するもの、一路の溪流眞に一幅の名畫で、巨手をやとひ來らざれば寫し難き妙がある。其間には四五の橋梁の谷に架して風致を添へるあり、飛瀑の高く懸つて路頭に落下するあり耶馬溪の流に比すれば勝ること數等で眞に天下の奇觀である。

この景色は大體を云ふと極めて陰鬱な境に在る。左右山が迫つて殆ど斧鉞の入らない鬱たる森林は天を蓋つて白晝なほ暗しの趣があり、溪流は鹽原のそれと比較すると之に於ては殆んど道を並行して流れ、鹽原の如く深く崖が落ち込んで下に水を見ると云ふ趣とは全く違ふ、水が平地の如き處に亂れて流れると云ふ處に特徴があり趣もある。

時間さへ許せば靜かに杖をひいて十分に景色を味ひ或はレンズの中に景勝の一二を入れるべきであつたが、何分にも湖水に達するには日が暮れると云ふので自動車を急がせたのは實に遺憾であつた。

自分は多くの湖水を見たが一體湖水の美は大抵似通つてゐる、十和田湖を琵琶霞湖に比べれば規模に劣るが風景に於て勝り宍道湖に比べるときは、規模はこれより小さいが風景美は或は宍道湖が勝るかと思ふ。と云ふのは宍道湖は松江の市街が水に臨んで一種の趣をなしてゐるからだ。然し十和田の特色は二つの半島が湖水に突出してゐるのにある。

この半島は湖水に美觀を添へるに相違ないが同時に幾何か湖面を狹くする氣味がある。舟を浮べて其の半島の邊を段々巡つて行くと數多の小さな灣曲があり何れも趣が深い、殊に湖水を繞る山と二つの半島は樹木が鬱翠として殆んど岩膚を現した處はない程であり、紺碧の湖水と相映じてスコットランドの風光を見るやうだ、然し遠く之を宿屋から見晴す場合は却つて半島が眺望を妨げて眼界が狹く洵に惜しい事に思はれた。



櫻痴居士の芳原の狎妓に代りて春文の繪入新聞に正誤を申込みたる文（上圖）文に對し成島柳北が居士を愚弄したる狂歌並に春文の狂歌（下圖）市島春城氏藏

○野口英世は福島県猪苗代の貧家に生れ日本を捨て文
命の教育を受けようとしたが、五米利加に往つて道と
学問の大家となり、北人となり学問さえ医術がいくら
あるか知れぬ、日本の四星が輝と五米利加の四つも
世界を照輝してゐる、米国では①野口が西中傘
をさしすの通ると、男女が氣の毒の思
あと手の傘を貸しもやる位な人氣があると
云ふ。大統領が傘を高く西中歩いてゐる誰の
摂ひつけないのに、野口は何んという人氣も仕合せ

ある。前年日本に帰つて来た時、三十の間を帰郷
しようとあくまで方面から迎へんと歓迎する人氣も
あつた。医界の大家が折柄を野口を迎へた時
の私も共の事と拝えんとの、三十数名の医家の面
の私もが非医者ばかりの中野口が主賓で共の右側
に地里博士が坐し、共清さま若し共の時
代と厚仁さまとの方から トント思つたことの事科
醫の先輩高山紀高氏がおれば。医者ひとり私
一人が交つてゐるのに自分ゆえ感もえれば、他の人々
も同じ様な感もえれてあらうと思つてゐたが、者
起人さまも血脈守と助氏の、北大さま私が特こかハえ
ゐる傍聞を預つたのに私も姉のと氣が直付いた。

私は野口と共の内親戚関係の深い縁故があつたのである。是故に澤在中一百余名もの多数が、野口は毎晩宅へ招待して盛んに接待した。其の無いとコボシた、其の其の野口の出き学生肌の人柄を見せる為めであるから思もよらぬ澤である。私の野口と云へば角内親しとのあるから伯米と大限侯に思つたとうか、そして自分の面を受け給へ考へて多くの時をかけぬと云へば、野口は其の長んで是非大限侯に思つたとのことである。一日は行つて侯いつものようの状況と面接さん果ては野口から侯とも云ふ事を同言つたのと求め、野口は親しみの

る鍵が侯に渡んめつも撮影した。侯の面白い一時間餘りも如何、私から促して自動車の中に同乗した私の落合の別荘に伴ふ野口は私の別荘に泊まれいたから云ふ帰朝したいろいろの合と相かんとか、今日大隈侯に引合して貰つたとの愉快の事は無つた、今日云三十の河の眼目である。と云ふ人は、私が特に田舎家をこしき別荘に行つた澤は、郊外の農園の風物を味はし彼れが故郷を思はせたいと思つたのと、毎夜形式的の生活に攻めえてみる楽んを救ひ出した。彼の生を書生時代の境遇に置いて見たいと思つた。北日郷家庭をもと彼の澤であつた。北日郷家庭をもと彼の為めに供したい

僅かに三種にあつた。第一は焼芋丸ごと釜から取り出した計りのものを皿に満載して出した。家の菓子いこんだといふ。食膳まで特製松前すし、この食品を載せ、牛鍋を供した。北海の三種は野口の情かけのものであるのみ、連日連夜異国人の高歌の馳走い繕けた。何人もこの種のものを作ることを思ひ付くまい。実を言へば彼れの嗜好を知ることあること、野口のひとり言ひ、日本浄土の最終の日を単に偉人に会つた喜びのみならず、私を別れる時旅行用の日本の筆硯とか彫られた豆い比野口の氏名印二顆を併せて祝道した。

と賜つた。野口は相席し書かうけ、席上で書いた。
が人々も有つたが、私は野口に言ふ。長い書と硯
味があるべンばかりを書いまする。偶まは本国の筆
硯を用ひ書き給くと言ふ。米国に戻つてから
私の注文面りの礼状が来た。

○昨年秋後く仰者の時ハ女婿の夫映者三石源三郎
同伴ひあるとの新潟と清水寺中保養を兼ねて
城へ立寄り立寄り綿屋へ入つて小宴を張つる
此北家へ花やし頃紙屋の家で家の隅々まで知
り枝いてゐるが四会さん稲の
で各家を巡る趣味がある私が一行と共に各宿
を巡りいろ〳〵の浴衣をとつかへ
の氏名をさとつた。夫合いえんと一盃を喫した三十数
年折絶へてこゝへ来たことのないのに私を夫がもう
てゐる譯がないと少き礼してゐると此夫ハ中条

の根行び事務を執つてゐることが
少えとあるがお日こかいつたの初めてだと云ふ此の私
ハ酒次掲げてある額を仰いで此の三湖の古い此綿
々亭の額い書き夫の記臆を去らぬうちに此の
掛と上ることどう七執着があると云つていろ〳〵のこ
と思ひ出しやすく入浴の際の事を思ひ浮べ
出こある数数を顧みて、この養者いめ多深切
である自分がいうそやこゝへ来た時風呂に入ると
養者が襟を掛けて、裳を高く捲り上げ、踝迄
で降り立ち三助四枚の角施をして背の脊
の垢を擦つてくれたのさん、魂を元へ戻すを得
ちつつとといふと、主人へ傷くちつつとそれ此の境

習ひ覚さまがおよろこびなされた。生来佐渡出身の山田教授がみて、北の習慣はひとつごとに限らず、佐渡の木まで同じ慣習があると語った。味るべき佐渡のこと、と家も近の一帯の海を隔てるのみであるから、或は佐渡のことは其後番しく学く様子もろくつとの佐渡のことは其後番しく学く様子もろくつきに家、江見の蔭の新家の思出を書いた書物と讀むと、中ゴロ木：お家がお人に折のことがあり、お蔭さまでもあるのあとを出つてお人にこと也書かれてあるゆゑ北の書が書かれてみる、お家が佐渡に得た句の中に

汗乱撥かすろ人を思ひけり

といふがある、佐渡を去つて新潟の船中の感といふ。江戸の美句の言を初めは解し難かりしが、越へて堺と其の謎を解き得たといふて其の法中をたのことく語つてみる。江見の紀言びある集海美が江見と語つた比孤之

其の扇を扇と云ふと云ふ〜思ひ出さるゝを書きつけるなり。自分の今まひたる扇子び合指の動いたのハ、或る人の持てる臙脂で扇面の一よを塗りつぶし上ゝを白地とし臙脂の塗くる所

を巧みにぶかしたこうひあつて、又右面の料紙色ひ又は扇子ハ各行折目毎こ五色び深めたるまでもあつたが多くハ雅びあつた。光琳特徴の色び紙高五寸則つたら更らようからうと思つた。扇ハ無地こ限るやうな思ひ、ナマナカの絵ハあらずもかるとも、舞扇ともそも金紙塗りつぶしハよろしかつたらめ絵ハ無きこゝろをよろこぶ位である。あるこ坊者の説こ扇の地ハ糊引かゝ原味を無てゝいふて要を頑丈ゝ心ゝこゝも紙扇の喫きんすゝ。ひあらゆるこゝ、摺数の僅かに立ハるこきぬ

上部の幅の廣い古風な白扇で味のある
ものだ。いつぞや骨の長さを一尺として節
を中央まであらいしたる扇子を見せたことが
ある、書畫骨董を玩人は形の
仕業である、これを携帯してゐる心大抵
のもの天がおよそ五ツ位迄である。もしもこれを名畫の用筆の扇子を經
驗に仕用したゐる人がある、他人のものを
うら惜しい氣がして別扇に替へられへ
保存さんよと注意することもある無記
解の人にアメラ書畫が扇面にメチヤ〳〵
のうつて仕舞ふことがとの位あるであらう

惜しいことである。支那の名畫のある扇子を
用ゐる習慣がある、保存し日々に愛つてそれ
を大切にして珍重するかく棄ることが
少ないが、日本の場合とは違ふべきである。上
方が或る神社と神と崇めた扇子と
同じ扇子を信者が交換する迷信的
習慣がある、それが為めに神社附近にうく
の扇子を賣つてゐる、それ故に絵師は
一定してゐるから、神と崇めたものを絵師へ
それを所持されへ幸福来るといふ迷信
馬を献すると似た習慣があるが北方が
寶ゝ千代の巧又は工風である。

一二を補ふ、扇が武将に指揮力のごとく用ひられたことを云ふとか、扇を護身用として用ひられたとか、扇を武器として用ひられたとか、不意に抜刀の武器となるを巧みに扇ひあしらふことあつて剣術の心得なんぞ扇一本が護身の役を立つとか、赤扇を大形に心得て武士もある。扇を直載とは仕つた者しい例ハ投扇興といふが起つて今でも流行する範囲に行はれてゐることハ多言を要しないが。諏訪湖が扇を以て書簡を拍つて来会をえるの扇の一種の用ひ方。

婦人ばかりが丈の用ひるハ。扇の紫法に就てハさまざまひあるかしら。普通ハ骨をもとの紙の中に没するのが例となつてゐるけれども裏に骨を露ハすことのあるこんハ原始的の物式とのる限ります、つまり地味なこうしたものがある。或ハ地紙が糊ひ骨に貼付されずに直に地紙が骨を抜きさしするのもある。支那ハ之れが多く書かれたものを貴む所から、いろいろの書画時さしに用ひる。日本ハ余く行はれるけれども無い訳ひもない。扇を使用すると共に定香をもあるる故向のあるのもある。紙の中に革拍を入

丸いのもあり、或は白檀の材を以て骨とするものもある。
朝鮮のそれの如く油紙で心つけるものもあり、これをみな
を黙して嬉く為めに品のよからぬものもある。概して
儀式用と実用とがあり、骨の数の多いのは大体儀式用
のようなもの、婦人用のは小形で優し味がある。けれども実
用まで不自由の点多い。実際儀式用は装から起つ
てそれが装飾となるものであらう。金持
ちのやうな無暗に扇子を使用する所はない。楽
屋者などは入つてゐると人の流行中で情況は
扇子が各人の手に一斉に動いてゐる。これも一種の習
慣になれば)なるほどの昔は礼儀を重んじた時代は
矢張り人前に扇を用ひてあるべきことを無礼と

しとしてある。
奈良朝頃一般の婦人は環状の中に火の丸の扇子
を射術のものを持くこと、白扇側
愛好も代らも射
愛好海天の一流は富貴の絵唱として名高く、花
扇は若女として花柳とともに、扇は婦人の
地位としても持ひあり、扇は婦人の
手に持てるものは名誉の印であり父母の手に持たさ
るは最美の為めであり、婦人家は杯を載る
所の盆用し、白銀製を扇に載せて載せるが
敬礼である。唯だ香炉かしきを夏のものとし
るから秋にそれは用をもちぬ、そこで冠の薄い
のを秋扇といふは扇の寒といふべき歟。

尚扇と親しき連想をもたらすものに檜扇がある。これは女
官の用ひる皇后妃妃女房の持つものであるが、檜板
を仕立てたもので大きさ
く、かざす為めに或は面を掩ふために用ひられて
ゐる、雅味のあるものである。現に存してゐる京都時代
のものもいくつかあり、熱田神社に保存されてゐるもので
美しい彩色が朝のものと云はれてゐる。其の絵が
少年時代をさそれが、えこう絵が施された
ものであることが知れる。京都で檜扇を作る所の
用をつとめた扇屋に林河弥七なども有名な
ゐる、此家の得意とするのは要が丈夫に出来
てゐるのと、涼風が出るやうな紙を工夫してあると

云ふことである。前に言いた松月堂の家好を
主とするものである。舞妓の用ひる扇を
仕舞の扇と異つた所がある。親骨が見
えず五彩の絵でくくられてゐるのも一特徴である
が、鉛が紫色をしてゐるのもおもしろい。
扇は手を受ける。仕舞の扇も賛美歌
のがあるからもあらう。
美濃流こうもりの扇
流流の異ることが直ぐ知れる。前
神社に扇を納めて神社のを交換する風習の
あることをいふとが、まえは今京都の祇園社
に行くとそれを扇子と揚げてゐる扇子を松竹

梅と旭日と鶴、之れに尉姥が配されてゐる。昔しは一寸言いとしものであつたかも知れぬが、今ハカッパ摺りで粗末な彩色が施されてゐる。太券にも祭典に扇を献する古式がある、其の形も中啓のごとく、寧ろ之れよりも廣ろく擴がつてゐるとの柄が割合に短く、之れに種々の絵が書かれてゐる。講釈師の扇を用ゐることハ言いとれが、之れハ紙で全部を包んでゐる、名づけて包み扇といふ、東京の落語家ハ扇で案を叩くことを好まないが、上方では盛んに叩くの違ひがある。儀太夫語りも又扇を用ゐて講尺同様に叩くことを補足する。扇の装飾に就て一二を補足すると、塗り骨が行ハれてゐる、往々小骨をいろ〳〵の色で塗り分けたものもある。扇の紙を折ることも一種習練を要する業であるが、古来これを女子の仕事としてゐる、職人尽にも女子が折つてゐる図がある。僧侶が中啓を持つてゐる場合がある朝廷や公卿ら之れを用ひられた。之を擬してゐるのが本来僧侶の持物であるかも知れぬ。支那に行ハれてゐる鳥の羽の扇子ハ更に漢魏六朝あたりの遺風であるかも知れぬ。孔雀羽の扇がある、宮家等の扇子なども鳥の羽を形どつてゐる。

八月廿二日記

私のいつもや中えゝ料理屋などゝもハ国扇
が配られ銀りやゝ公家ハ扇子が来る
とゝ云ふとか、山里の何んかの会社で、扇子こ
れ打紐をつけて配つてからうるんが祖父から
んてどこの会社でもひもつきを配ることと
なつた。其のぬ為めるとよいことまハ(ひ
ものか、品のよろしいようである。むかし長金
の旅行者ハ扇面に細字ひ書根歌や俳句
行やイ字の文句を書いた扇帯したようひ
あるゴンナこのを語流行することが流行し
ないらもある。此来社会社の異事又ハ
ようも配る扇子の絵の内ゝ観山雅邦

極月ゆゑ絵をかせしてこのかいくらも
あるゴンナこのも古ゝゝゝるんバ屏風など
ゝ張り交ぜて面白ハ扇面はかゝ知れぬ。
版画の扇面はかゝ粋をあつめて屏
風を作るのも一番ひあらう、古い扇
を写真にとゝゝ集めて各扇に張りつめ
たゝこのようゝゝあるが、楽しみのようひ
ゝ骨付の扇面で四名人の書画のあるこのが
ゝ家こひとゝゝ珍重がられて、骨付のまゝゝ
以て價が弐倍とゝゝるゝ。骨付のまゝゝ
なることが稀ひあるからであらう。扇
子の用ハさまゝゝで夏時涼を納ゝ者も

はかりひろく、軍隊を指揮する大将は指揮の
ために用ゆる扇を持ちて、或は儀式を示す
指揮とこれを用ゆる。或は慶賀の意をあら
はすとも用ゆる。形もさまざまにあるが
上部の廣かつてみるのを中啓といふてある
公家や僧侶が儀式用ゆるしもみるのこと
にて婦人の目的ひろまるべし。

○加賀のさる友人が京京と豪華な生活を送りつつ
九月毎年節分の日をもつて祝宴を分即分
会といふを催した。私も あるに招かれて加賀

が差支があて出られなかつたこともあつた。此会は飲食義
端すると豆を以つて執向を凝らしてその興味
が深くあるとも噂するよりあつたのであつた。
出席と極めて、あまり私に對して豆腐を投
した。其頃私は豆本の蒐集に没頭して
九頃であるから、返前に自分の豆本数味を
も御記述が豆に就向さえもみると少くない
何事も打棄てて此出掛けるとなつて先
方の吉状が滑稽な書かれてみればかりこちらから
も滑稽な書を書いてあつた。こちらから
霜家であつたと記憶するが、みなも凝つて
床に何集例人の古い豆の句の帳が掲げた

聽吹

膳部の平皿数ハすべて豆や豆と同じ高の按子料理で、引出しあるまゝが再び出り豆が堅つてあつた。席が定まると直ぐ傍の式があつて、前方数が男性しも豆を撒き、鬼外福内を唱し、続いて豆と同八位程々の餘興があつて毎一回を笑ハせたが、流石に豆と同める高五づくめで数番の餘興の豆のモ有者の踊のみがすべてをのつとめて大いに面を張りし、酒肴まして私の親しき人とし此のを親へ引留めん、眼目の餘興がまだ出るのから、今日ハ辛抱せよと云ハるゝ。此後すると、突然坐敷の中方の電燈が暗くなると、現る出たのが、裸体の婦人ひ、踊約をあしらひつゝ、ダンスをやり出したのゝ、私ハそ

の高の餘興に一驚を喫した。既に一回終が回つてゐるから、暗中のダンスハ無が無い。間もなく電燈もとゝ明るくなり、踊の中央まで進入て踊れと需もあり、踊約を撒せよとゝあつて、一番でりるべき舞踊を重ねの果ていの見々なる踊舞を現する至つた。私ハ其際主人に面をのい往々豆の趣向のあることハ想像かしも奏つたが、真逆ゝ豆を見せんとハ思ハ列らるゝとは一笑し、ことがある。一月十四日記

○明治ゝ年ゝ月ゝ日ゝ 人ゝ数多くある

○俗歌に云く

花の午咲く生る実は一つ九万九十九は無駄の元

人間の為すことは無駄なことが多く、元を不経済なといふから、無駄とは経済の、自然が数へたことなり

ある。人間が必を産まるゝ無駄を交接をしてゐることよ。尚ほ其上に産児制限を味ひてゐる人も多いのは無駄なり。

朝顔

漸々夢を通ばして毎朝二十数の花を咲し朝起き来んば萎さまくの花が目を悩ませる、女児は毎朝花蕾を数へて喜ぶと云ふ。夏時は五時前に起きることも床も早く、寒もすると四時前に起きることもあるがいつも朝顔の早起の方が早く目をさましてゐる。新芽の配置とは六時頃やうとゝある。新芽も実は朝の元ものである。こゝを毎朝蔓く既に指て朝顔よりよく似てゐる。朝顔が時の思ひ付きもきまくの花を咲さるの枝の、新芽も言ふの記るものあることがある。朝顔はいくら詠めかゝるも書頃とるると満

人で仕事が、新らしく得る印象も亦似やうなもので、毎朝接すればそれ切りで何等の印象を殘さないことが多い。二者共に果敢ない運命の持主と云へば云へるなり。想ひ起す讀書子新聞の自分の在社時代、創立第十年目の紀念のとき、新米少人の頃で得意先へ扇子を配つたことがある。四角の表に云ふ通り和中と擬して扇面の上頭の端に紅を塗をハスカへる彩と云ふものが和中の古句に毎朝聞くことが新しく、句は略して言おもしろ和白と彩りの似寄りを含めれるで特に あつた。句を略して云ふ少人の面目があつて

此記事を書き畢つてフト記憶ふと呼び起す事
一事あり、久しく大阪に居る書畫の高
らかに未だ様々のこと中に、サヤ形帛紗大
の綸子に浦上春琴が櫻花と木蓮とを畫し
た上に山陽の題詞あり、海の題詞ハ日失念し
たが、初めて見た時山陽の書いてあることを氣
付かなかつたが、はがりかるに、後歌と束頁と認めた
る、書風も平素とハ稍々異るる
所があつたが、併しやうやくうして束頁
ハ頼の今字であるる氣がつき、更らに西中
何か寫意があるかと、棄しれ玉愛、
果して櫻ハ流連と音通ひ

東京 相馬屋製

あることを覺つて一笑した。春酔中戯れに
狩牧るる者いてやつたとやうなれあるる。隨筆
粉山湯に洗らしたから、筆の序きこと
添加しておく。

（松著）

まく、

以下全て

白　紙